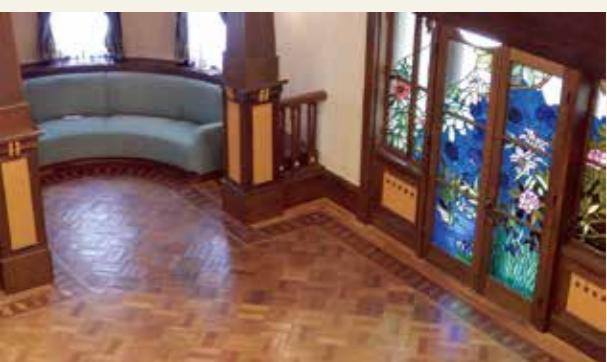


寄木張り



大階段から見た新しい木材との境界

二葉館の大広間や展示室、廊下の床を見ると、木が模様のように張られています。これは寄木張りと呼ばれる建築装飾で、小さな板を一枚一枚床に張り合わせてできているのです。「寄木」というと寄木細工や寄木造のような日本の伝統工芸を思い出しますが、寄木張りは明治時代に取り入れられた西洋文化を象徴する建築技法の一つです。

当時の華族や政治家、実業家たちは文明開化の中、西洋文化を取り入れた住宅を建てていきましたが、その中でも客人をもてなす応接間などに寄木張りを使用していました。現在は東京都庭園美術館として利用されている旧朝香宮邸や迎賓館赤坂離宮の「羽衣の間」でも見ることができます。大広間にある大階段から南側

の円形ソファの方を見ると、床の色がわずかながら違うことが確認できます。このソファの付近の寄木は創建当時のものと思われる部材を使用しており、これらには柿渋が塗られていたため色が違つて見えています。新しい木材で作られた寄木張りも見事なものですが、当初の部材を改めて見てみると川上貞奴や福沢桃介のこの建物への想いを垣間見ることができ、二葉館はその価値の高さを現在に伝えています。



廊下のヘリンボーン張り

した。細かい作業が多く、施工に時間がかかる寄木張りを採用することは経済的な豊かさも表し、趣向を凝らした模様を作ることでより豪華で華麗な雰囲気を醸し出しています。

現在の二葉館は移築復元されたもので創建当初の建物そのままというわけではありません。しかし復元に際し残っていた部材についてはできる限り使用し、当時の風情を今に伝えて

います。この寄木張りに使用された木材も残つており、現在も大広間で見ることができます。大広間にある大階段から南側

の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」があります。

「百花百草」は、岡谷鋼機株式会社が所有する建物をリユースし、文化のみちの休憩施設として、平成19年4月に開館しました。470坪という広い敷地には、大正9年に建てられた書院や茶室が並んでいます。本宅の跡に新築された多目的ホールでは、随時行われているピアノ演奏を楽しみながら、セ

ルフサービスのお茶などをゆつたりといただけます。多目的ホールから見渡せる庭園には常に花々が咲き乱れており、こちらも散策することができます。

この庭園は、江戸時代後期の絵師・田中訥言作「百花百草図屏風」(重要文化財指定)に描かれた草花を再現するために造られ、施設名の由来にもなりました。「百花百草図屏風」は岡谷家の所有でしたが、現在は徳川美術館に所蔵されています。

花以外にも、四季折々の花があふれています。特に3月から5月初旬にかけて花壇など70種類以上の植物が収集された庭園の中には小川が流れおり、その両側の花壇でアジサイやツツジ、フジバカマ、リンドウなどの花が咲き誇るチュー

リップは一度訪れてみ

花以外にも、四季折々の花があふれています。特に3月から5月初旬にかけて花壇など70種類以上の植物が収集された庭園の中には小川が流れおり、その両側の花壇でアジサイやツツジ、フジバカマ、リンドウなどの花が咲き誇るチュー

リップは一度訪れてみ

「百花百草」には、この環境を好んでセキ

散水には、敷地内の井戸水を汲み上げ循環して使用し、館内の電気や照明は屋根に設置されたソーラー発電でまかなつているそ

です。また、空調は地下に空気パイプを埋め

て地中熱を利用するなど、まさに環境に優しい都会のオアシスを実現しています。この

からエコの取り組みが行われており、小川や

園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用するなど、無農薬

の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」ではこの美しい庭園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用するなど、無農薬

の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」ではこの美しい庭園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用するなど、無農薬

の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」ではこの美しい庭園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用するなど、無農薍

の街並みを歩いていくと、文化のみち「百花百草」ではこの美しい庭園を維持するために、摘んだ草花を腐葉土に活用する